

2 山地・里山の植物

八幡浜市の山地や里山の植生は、「緑のダム」として水源を守るとされる自然度の高い森が山頂周辺に残っているものの、植栽されたスギ・ヒノキ・モウソウチク・果樹などが大部分を占めている。

(1) 出石山 (812 m) 周辺の植物

本市の最高峰で、金山出石寺がある頂上周辺は、瀬戸内海国立公園の一角を占める。樹木ではケヤキ・アカガシ (写真3-2-8)・スギなどの巨木に混じり、カツラ・ハリギリ・オニグルミ・イヌシデ・エドヒガン・チドリノキ (写真3-2-9)・ミズキ・ツリバナなどの落葉樹や、タブノキ・カゴノキ・モミなどの常緑樹が高木層を構成している。その樹下には、ゴマキ [県 EN] (写真3-2-10)・ウリノキ・コパンノキ・アオキ・ハイノキ・ツルシキミなどの亜高木に加え、チュウゴクザサが広範囲に生い茂っている。草本類では、ヤマルリソウをはじめ、セントウソウ・ヒゴスミレ (写真3-2-11)・アカネスミレ・フデリンドウ・フウロケマン・キッコウハグマ・イワボタン・ミヤマカタバミ・アケボノシュスラン [県 VU] (写真3-2-12)・サイハイラン・タカネハンショウヅル・ハガクレツリフネ・オタカラコウ・ハンカイソウ・キヨスミウツボ・ヤマウツボ・ヤマホトギス・アケボノソウ・トチバナシジミ・キビシロタンポポなどが生育する。ヒメナベワリ・ハシリドコロ・ナンゴクウラシマソウなどの有毒植物もある。シダ類では、ジュウモンジシダ・ヤマイヌワラビ・キヨスミヒメワラビなどが目立ち、オシャグジエンダ・ヒメノキシノブ・イワヘゴなどがある。

しかし近年、園芸花木であるセイヨウアジサイ類の植栽によって、ホクチアザミ・ケミヤマナミキ・オグルマ [県 EN] (写真3-2-13)・スズサイコなどに加え、マルバスマシレ・センボンヤリ・チゴユリ・コケイランなど、小型の植物が圧迫されている。さらに盗掘や、スギ・ヒノキの植栽による草地の後退などで、記録に残っていたオミナエシ・カワラナデシコ・フナバラソウ・ヤナギアザミ・オキナグサなどは、現在まったく確認できない状況である。



写真3-2-8 アカガシ
(2013年4月21日)



写真3-2-9 チドリノキ
(2010年5月17日)



写真3-2-10 ゴマキ
(2012年5月20日)



写真3-2-11 ヒゴスミレ
(2013年4月30日)



写真3-2-12 アケボノシュスラン
(2011年10月3日)



写真3-2-13 オグルマ
(2014年5月12日)

(2) 銅が鳴 (767 m) 周辺の植物

かつて佐田岬半島全域に数多く点在していた銅山の一つが銅が鳴にあった。よって、好銅性植物を代表し「金山草」とも呼ばれるヘビノネゴザ (写真3-2-14) や、アカマツ・フジツツジ・リュウノウギクなどが、鉱口周辺のガレ場に生育している。また、閉山後は頂上部までスギやヒノキが植栽されていたが、近年は東部の日土財産区と西部の宮内財産区で実施されている間伐により、林床にまで光が差し込んだ結果、土に埋もれていた種子が芽を吹くなどして、多様な植物が復活しつつある。

県内では大変希少なベニバナヤマシャクヤク [県 EN・環 VU] (写真3-2-15) をはじめ、ニオイタチツボスミレ・アケボノスミレ (写真3-2-16)・ツルニンジン (写真3-2-17)・センブリ・カワミドリ・ナギナタコウジュ・ツルリンドウ・サワヒヨドリ・ギョウジャアザミ・エヒメテンナンショウ (写真3-2-18)・イヌガンソクなどが生育し、イワガラミ (写真3-2-19) やツルアジサイなどのツル植物も見られるようになった。



写真3-2-14 ヘビノネゴザ
(2011年6月7日)



写真3-2-15 ベニバナヤマ
シャクヤク
(2014年6月14日)



写真3-2-16 アケボノスミレ
(2014年4月26日)



写真3-2-17 ツルニンジン
(ジソブ)
(2012年9月22日)



写真3-2-18 エヒメテン
ナンショウ
(2008年4月17日)



写真3-2-19 イワガラミ
(2011年6月30日)

(3) 愛宕山～萩森山 (203 m) 周辺の植物

住宅地から果樹園を抜け、萩森城跡がある山頂へと続く野道では、春季にコスミレ・キランソウ・ヒメウズ・ジシバリ・ハハコグサ・オンツツジ・ザイフリボク・ヤマザクラなどが開花する。夏～秋には、ツシマママコナ・ヤクシソウ・アキノタムラソウ・ヤマハッカ・ノコンギク (写真3-2-20) などの花が咲き、アケビ・サネカズラ (写真3-2-21)・ガマズミなどが野鳥や哺乳類が好む実を結ぶ。小規模ながらも点在する溜池周辺ではカワヂシャやオオタチヤナギが、松谷方面の小さな谷ではカカツガユ [県 VU] (写真3-2-22) やシリブカガシなどが珍しい。



写真3-2-20 ノコンギク
(2013年10月19日)



写真3-2-21 サネカズラ
(ビナンカズラ)
(2013年11月6日)



写真3-2-22 カカツガユ
(2013年10月29日)

越地方などの農民が、農閑期に都市の建設現場などで働くこととされている。しかしながら、奉公や日傭人なども含めると、明治時代から多くの人々が出稼ぎをしていた。小規模農家の多い南子の地でもさまざまな記録が残っている。大工・左官・漁師・酒造・蠟燭・伏子・機織・丁稚奉公・女中奉公・子守奉公などで、京阪神や北九州に行く者が多かったようである。もちろん、小遣い程度しかもらえない丁稚・女中・子守などは、家への仕送りはできなかった。



写真1-38 西井久八銅像



写真1-39 吉田亀三銅像

中には、国外へ働きに行く者もいた。現在でもその定義は確定していないようであるが、「移民労働者」、「外国人労働者」といったところであろうか。向灘出身の西井久八(写真1-38)は、1879(明治12)年にアメリカに渡り、数々の事業に成功して巨利を得た。久八の成功談は近隣の村々に広がり、彼のところで働くためにアメリカへ渡る出稼ぎが激増した。真穴村や川上村などの出身者が多かったと言われている。特に真穴村は、成功した人々からの送金や帰国者が多いことから「アメリカ村」と呼ばれるほどであった。また、川之石村出身の吉田亀三郎(写真1-39)は、1911(明治44)年に5人の同志とともに帆船でアメリカに密航するが、捕らえられ送還される。1913(大正2)年、亀三郎は川之石港から25人の仲間と2度目の太平洋帆走横断を成し遂げ、カナダへ上陸した。のち、パンクパーに移動し、漁業などに従事して財を成した。

また、昭和10年代になると、国策により集団で満州へ移住した者も多い。太平洋戦争後には、大分県の国東半島でミカン栽培に当たる人々も出た。

第6節 信 仰

1 氏神・産土神・鎮守神

氏神は、本来は古代の氏族が祀った先祖神又は守護神で、血縁的な神である。産土神は、その者が生まれた土地の守護神で、地縁的な神である。鎮守神は、その土地に住む人や建物を守る神で、神仏習合により生まれた神である。このように、氏神・産土神・鎮守神は、もともとは違う神であったと言われている。

平安時代以降、氏族社会がだんだんと崩れ、これまでの氏神信仰は薄れてきたが、荘園領主は荘園を鎮護するために、その土地の神を祀り氏神とした。このような時代の推移の中で、氏神を祀る集団は、血縁的なものから地縁的なものになり、次第に氏神と産土神とが混同されるようになった。また、鎮守神が荘園内に勧請されることにより、氏神と鎮守神も混同されるようになった。現在では、氏神・産土神・鎮守神は、自分が住んでいる地域や人々を守ってくれる神として、ほぼ同じように考えられてきている。

各地域に神社があり、さまざまな神が祀られている。矢野神山の八幡神社は、八幡大神(菅原天皇)を祀り、武将(特に清和源氏)の尊崇が篤かったが、やがて、矢野郷28か村の庄屋が協

写真1-40 保内町宮内の三島神社の秋祭り
2014(平成26)年撮影写真1-41 川名津の天満神社の神楽
2014(平成26)年撮影

力して社殿を造営している。宮内の三島神社には、大山祇神が祀られている。山の神・海の神・武神・酒造神として、古くから地域の崇敬が深い。また、八代王子の八咫神社は、素戔鳴尊・奇名田姫命を祀り、奈良時代に王子森牛頭天王宮祇園社として創建されたと言われている。

そこには、神社のある地域に住み、氏神・産土神の守護を受け、それを祀る氏子がついて、盛大な「祭り」(写真1-40、1-41)が行われている。かつては、土地に生まれた子やよそから転入してきた者は、宮参りをして氏子入りを認められたと言われている。保内町磯崎では、お旅所に安置した神輿の前で神職が赤ん坊を抱きかかえて祈禱をする「氏見せ」の神事がある。

2 屋敷神と屋内神

屋敷神は、屋敷の敷地や背後の山裾などに、木製・石製・瓦製の祠(写真1-42)に祀られることが多い。この神は、屋敷や土地を守護する神で、祖先神や農耕神(田の神・山の神)の性格を持つと言われているが、既に信仰が途絶えているためはっきりしていない。



写真1-42 瓦製の屋敷神の祠

屋内神は、神棚を含め家の中に祀る神で、台所や風呂場など火を使う所に「カマド神(荒神など)」、井戸に「水の神」、お手洗いに「便所神」を祀り、災除けなどを祈願している。大みそかには、お飾りとお供えをして、一年間の無事を感謝した。そして、正月には、汲んできた若水や、若水を使って作った料理をお供えしていた。かつて中津川においては、正月13日に、栗の木の一端を十字に割った50cmくらいの棒を神棚に供え、それで部屋の柱、人の頭をたたいて、豊作であるよう、頭痛が起らないよう祈る「アワンボウ(栗穂)」の行事を行っていた。栗を常食としていた頃の行事が伝えられていたであろう。

3 水の神・田の神・山の神

日本神話には、罔象女神・閻魔神・閻魔象神・瀬織津姫命・天之水分神など、水に関する神が多く登場する。また、水の神の象徴として龍・河童・蛇などがある。水の状況が米の収穫を大きく左右することから、水の神は田の神と結びついている。さらに、水源地に祀られる水の神(水分神)は、山の神とも関連して考えられている。農民の間では、春になると山の神が、山から降りてきて田の神となり、秋になると再び山に戻ると信じられている。

業を再開している。

1952（昭和27）年9月30日現在の設備は、精紡機2万8,000錠・撚糸機400錠・織機626台、従業員は男子192人・女子552人で合計744人であった。

1958（昭和33）年頃から、紡績業界が不振となり、営業時間を短縮しながら赤字採業を続けていた。ついに、1960（昭和35）年9月、本社の経営合理化方針により、70年の歴史をもち、数多くの先覚者の尊い努力で保内町とともに発展してきた川之石工場は、地元民に惜しまれながら閉鎖された。これにより、八幡浜市（旧八幡浜市・旧保内町）の主な紡績業は全く姿を消してしまった。

東洋紡績川之石工場では、深夜業廃止問題が長年にわたり政界・実業界・労働界などにおいて議論された。1929（昭和4）年6月30日をもって、廃止されることになったが、同年2月1日から深夜業を廃止し、1日の実働時間も17時間に短縮されている。

1918（大正7）年、県内ではいち早く（県下で2か所目）医局を設けている。病院を新築し、職工と職工の家族の診察を行っている。俳人・富澤赤黄男の父、岩生も川之石で開業中、工場の嘱託医師を務めている。

さらに、教育の場として補習教育所を設置し、裁縫・茶の湯・生け花などの趣味・教養の科目について専門の教師による授業も行っている。また、寄宿舍設備の充実、分配所や売店の設置、娯楽堂（講堂）の建設、パレーボール・テニスコートの施設設備を充実させており、歌劇の鑑賞の機会を作ったり、学芸品展覧会や運動会を行ったりするなど、福利厚生面の充実や合理化が進んでいた工場であった。



写真3-8 東洋紡績川之石工場（昭和期）
保内町商工会提供



写真3-9 生け花風景
『東洋紡績川之石工場写真観』1926（大正15）年



写真3-10 東洋紡績の主要商標

『東洋紡績70年史』1953（昭和28）年

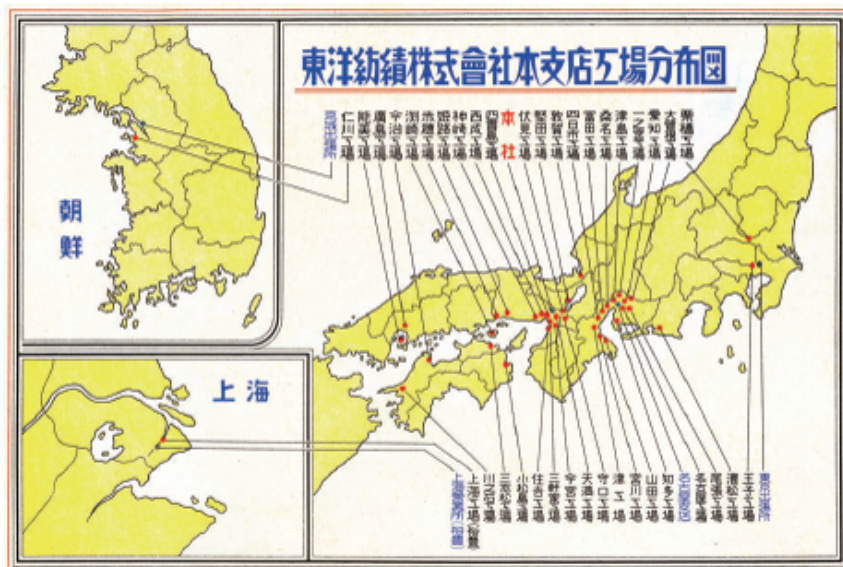


図3-4 工場分布図
【創立20年記念東洋紡績特要覽】1934（昭和9）年

3 製糸業

生糸は、1859（安政6）年の開国以降、昭和初期まで、我が国の最大輸出品であり、製糸業は外資獲得産業として日本資本主義を確立した重要な産業であった。

八幡浜地方でも明治になってから、多くの生糸を横浜・神戸に積み出して養蚕農家を潤し、ひいては、この地方の経済を支えてきた大きな柱であった。幕末の頃から、農家で自家産の繭から手挽で生糸をとることが行われており、旧八幡浜地域・保内地域で製糸工場が設立されている。その数は四十数社を数えており、いかに貢献してきたかということがうかがえる。



写真3-11 菊池製糸工場
【伊豫八幡浜写真観】より

(1) 青石製糸会社

1886（明治19）年、宮内村に青石製糸会社が設立された。

都築温太郎・兵頭昌隆・古海深志・宇都宮淳らの共同経営による、座繰式20台の製糸工場であった。松山から講師を招き、従業員は女工27人、その他8人で合わせて35人であった。後に製糸が盛んになった宇和4郡や喜多郡などから視察者が多く訪れる時期もあったが、数年後に製糸は休止している。同工場跡を使って、兵頭昌隆がビール製造を始めたと言われている。